

近昔より歌と嗜と誅諧と好む人其名高ぶ中も尋常なるもの集めて  
 歌能百人撰とて安永の石雲居海壽とある人のあせり小冊字本で世に傳れり  
 是と視る名と歌能のあせりも其人の傳へたる雪の朝の無と撰る人づきの  
 郭公の初音と聞る心地をまるとされそ其傳と添あるぐの画像はさあつたに  
 たる自然に人のありあり事れ想像せられ昔と慕ひて曉る捷徑中なるべし  
 此の撰述ありたりと書肆知新堂のりんと実中と思ふ系譜行状英名と共におも  
 きの村雲のるる碧空亦明亮月と観るやう也萬のあぬる也又勝る美名を天方此  
 らの姓氏も詳るるるるる太山樓と名づる谷間ふるる類也欽慕の情へ等閑を  
 どのれと委曲記さるか曾京本中揮あるの混りるる行中更なる  
 念を補入れて数も充む抑平有活物也其才徳小徒へ俊傑の心  
 あり人を察るる此道なる海壽かえらむも則是るる花朝月夕  
 まあつて賢愚を試さるる天子のこころいふも温るる  
 于時嘉永己酉歲  
 柳下亭種員撰

石雲居海壽











琴今

破鏡尼の江州善所の藩中  
昔浴外記が妻夫の併号を  
曲翠とよびて芭蕉の門人  
るりその身の和歌を好と又  
はう後の名人あてま世を  
さうり後和泉の槻小菴を  
おすび雑筆とて破鏡とあり  
近佛とつるのやま沖と旦  
暮終をるるあじ歌を縁  
て憂をるるむ

○秋あふ秋のるるいと申  
ふを縁とても神乃  
はゆけり

其終のまい今もる不破鏡  
流とて壞の地中にとりて  
る

甘谷

元禄の以芳雲とるる傍曲其茶を  
好とて諸国とある或附高野山の  
某院は其茶をうとて若くはかお  
とりて空と仰ぎえと申利更  
やあらぬ貝部の鳩飛ん甘谷會  
のあれが今もて彼所もんと立  
とま多る府中の人々所りて此所  
より京迄の里殺も遠隔れぬ身  
何程急とて争次間の間小あつを  
ゆふ芳雲云微笑の思傳へ一日ふ  
五十里と歩行に至るの最や此  
との一とて此傍後小陸奥に  
空電の浦とて乃の辺の石小腰と  
かけ懐中の茶のりい  
○こても分の旅路もあつた  
かまれ浦のあつた乃けあもれ  
かく書とりてそ屋漫しぬ

大正







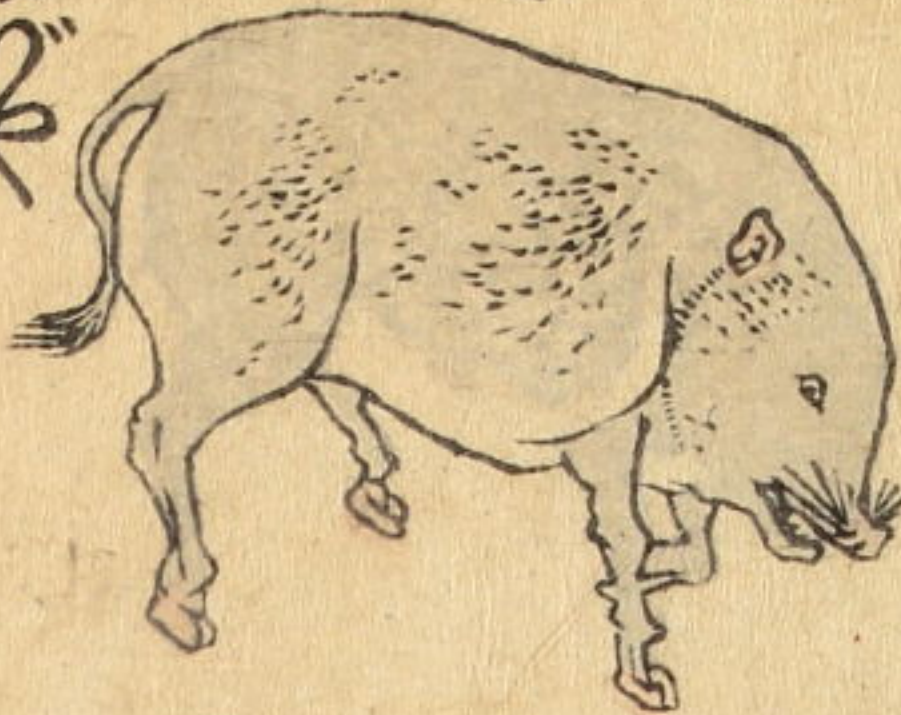


けだもの歌合八番

一番水だのむら  
た獺 恋  
おふさむ  
かむも猪の  
これとと  
たまごうらそと  
月の歌どふ



右豚  
糸ぐらぐら  
心ひと  
おふくと  
うけひく  
君れ  
あまひ  
まがや



左様

あまあや  
たちても  
おても  
の月や  
面むら  
よひあつとまで



二番月まらあつと  
右犬  
りまあや  
たのき  
たのれぬ  
ありのげや  
まやふ  
とせぬ  
月そらるき



神祇

これら  
社よ神  
この内  
のま  
まのり



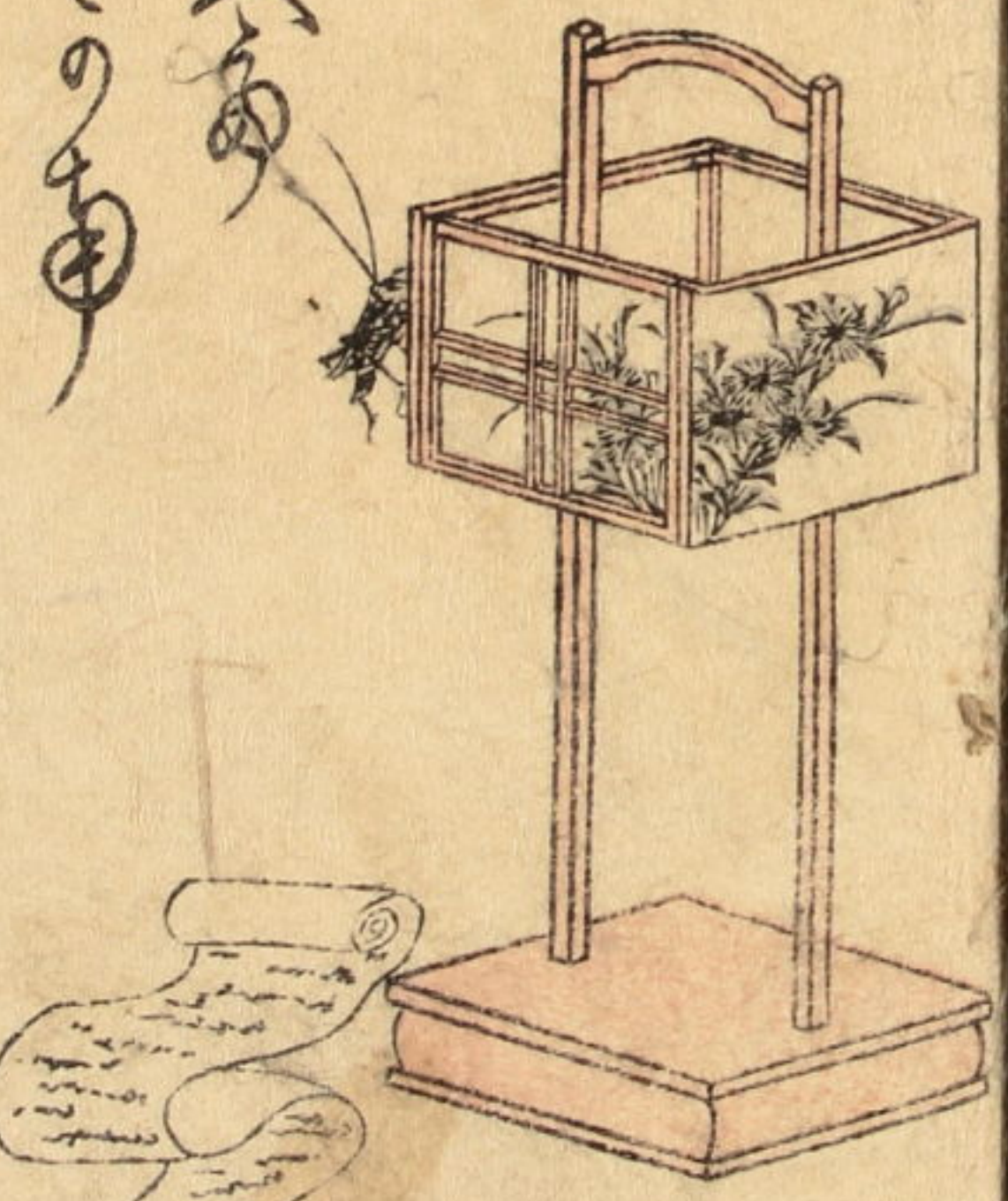
釋教

灌佛や  
め  
る  
まのり



恋

あや  
やせと  
人  
あつと  
周の車



無常

あつと  
腰乃たぬ  
人を送り  
あつと









五番あつさる意

左程

のりつりつり  
つりつりつり  
かひでも  
ありや  
あつさる



糸よたごらん

右程

北窓や  
ひつり  
ささる  
早の  
あつさる  
けつり  
あつさる



左程

たのれ申情  
あつさる  
あつさる  
あつさる  
あつさる



六番あつさる意

すのあつさる

あつさる  
あつさる  
あつさる  
あつさる



右程

山吹 面影

あつさるあつさる  
あつさるあつさる

郊外 垣

あつさるあつさる  
あつさるあつさる

菱 形見

あつさるあつさる  
あつさるあつさる

杜若 魚

あつさるあつさる  
あつさるあつさる

石竹 松子

あつさるあつさる  
あつさるあつさる

蓮 池見

あつさるあつさる  
あつさるあつさる

波 氷室

あつさるあつさる  
あつさるあつさる

姫 百合 光草

あつさるあつさる  
あつさるあつさる













歌傳おれど意致

○附名ありしもかけぬまのけり  
 ころそまもそまの縁まつる  
 ○花のちりも消まらぬやほらま  
 まらもいふ更にかはれまま  
 あらぬられのまのいのち  
 ○あはれ夜やのぬふもははれ  
 ○山のこも根くまほらま  
 うのまそこのふかほ白くも  
 ○と山のあられやいふ土のあ  
 ○多油の尾上のふれまま  
 あつたかけくもやあつらん  
 ○持楼より余所のふまも  
 ○やまのさかきまふの秋うせふ  
 秋さうぬあやとまのこのま  
 ○こまやを地ふ秋まのの附る

大政大臣無良公の法成恩寺  
 殿と申なる御坐候あつて文学を  
 好まされ数万巻の書目藉と集め  
 聖十才とて所充服あはれ空虚  
 何ともあれど怪き声ありて  
 猿のかから不るやませなり  
 とせえか頼て縁の方を走らぬ  
 丸服の糸の内乃かふま  
 とつけさせあひとるけ公の御  
 猿は似あふ由多るとも初に附ら  
 る後才とせばまがそ其著一  
 述作も世あわゆるたれ。世あわゆる  
 小島史法光表帝れ多と植  
 松若て流あひと法法松の  
 禅閣と称しなりぬ曾南都  
 ぬひとろ麻を流しぬ百首  
 ぬあひとろぬ世南都百首  
 も或の麻百首とも号するの則  
 あり





後陽成院上之賜二位則忠  
 の女より當時無双賢女を  
 父母不仕て孝心のと深かりけ  
 るべ其沙汰殿上にかかれり  
 後水尾院より清幼稚を  
 ましほまところか下けるも當今  
 勅をらりて所守役とる  
 賢くすまきも偏ふる  
 女性の清言の宜きよる  
 所るるとを又和歌の道  
 達一或時圍の梅といふ  
 人るらるる名やたん小歌  
 こがも松よこのふ梅が  
 此他秀詠いとあり



貞徳の松永秀徳息幼名勝  
 熊と云弓矢と捨て風雅の道  
 を成成長ても鬚と束ね童の服  
 一自長九と号初去古法  
 印と師とて和歌をまゝ後非諧  
 の乃ふあつて入後想の苦ふあつて  
 我菴のかさふ稻荷を勧禱志  
 花開宮と称一賀詞の歌  
 ○よる代をこのれやらのま秋の  
 此年の秋禁庭より俳諧花の本  
 の名とたまの由發り又後妙き  
 ○心してふのれちり乃所内  
 ○甜らむと中るひたてのたの雨  
 ○冬ごりの虫遠まをもあまうと  
 俳諧の式全くさだまりの此翁  
 ふよる所あり









丈山俗唱如右清門重之云詩仙  
 堂六山入第其号其先武士  
 乘寺村二世の只早暮不  
 詩をうけ流と流奉と身の樂  
 ととある老て後いれまふ世のま  
 とと物憂やかのひん〇とてうら  
 秋を詠ととよりまへつるら  
 かのりとも貞徳とてきて年  
 の因をたちまひんものまは已を  
 へてまておやまひまうとま  
 〇とて上まふ流れり石川や  
 せまの石川のつとまうとまん  
 幼くいあつととえ寛文十二年  
 壬子歳五月廿二日九十歳あて  
 没ま其遺物数種今於彼地  
 あり



石川丈山  
 波々々々々々  
 小川の清  
 見流る  
 波々々々々々

宮本武藏 高重の播州の産なり  
 武道不達一両刀と手練せり  
 世の人の並見ある所れも此人  
 画も又然る風流のなまうと  
 かのさむ士入寛永の西軍軍あ  
 ずり武藏が知音の彼所へ發向  
 於江戸を去て其陣見舞もんと  
 て兼て深くかき吉原今大門通  
 一い 桂若桂木太夫と終へ暇乞の  
 ため立寄し木柱木信小是を見  
 立鏡別とくと扇とあつけり〇の  
 のあとりるの此時の吟は彼桂  
 木が紅の抱帯と解て竹刀二本と  
 つと打ちひ結ひて足と差物ふ  
 つり廊よりまふまは發足するま  
 小其立立と花美るけり見る  
 者群集ありなるま



宮本武藏  
 波々々々々々  
 小川の清  
 見流る  
 波々々々々々



宗長体師ハ駿河國嶋田駅  
 鍛冶何某ガ子ハ幼キヨリ  
 凡流ノ心ユク宗祇ト師シテ  
 乃トモマアホ一ト云ク十ヲ知ル  
 ノ才アリ又二休禪師ハ云ク  
 禪法ヲ受諸國行脚ノ時  
 勢州関地戒トシテ所ニヤ  
 けふ折柄底ノ橋花ガ  
 るり一紙ス  
 ○立花ノカサニラレテ後夜ガ  
 ○山搦ガノハシラセヨハベ  
 ありト我我ニ生行ト切  
 國ノ守ノ杖ハ奉ルトモ  
 八十ニ母ノ上ハハルガ  
 杖ノ款ヲ詠カレトス  
 捧ける

田氏捨女丹波國栢原トシ  
 山里ノ産ル性質限ラズ  
 秀才モ○愛ノ物ハハルガ  
 時ノ吟ガトモ一年先トモ  
 ○萱原トモヤ枕アツ西ガ  
 都ノ季子吟ハ從テ和歌ヲ  
 是盤桂禪師ノ門ハ入テ  
 ○秋風ノカサニラレテ  
 心ヲモクモハルハハ  
 斯ルハハ切名ト融ト改  
 ぬて播磨國經千里ハ  
 生涯ハハハハハハハハ  
 ○日ハハハハハハハハハ  
 け化秀ガ詠トモヤ

宗長法師  
 杖ハ  
 誰モ  
 何ニ  
 君ハ  
 杖ハ  
 杖ハ  
 杖ハ  
 杖ハ  
 杖ハ



田氏捨女  
 杖ハ  
 杖ハ  
 杖ハ  
 杖ハ  
 杖ハ  
 杖ハ  
 杖ハ





相田勾當の伊勢国神路山  
 の麓に住し人なり生得て十二  
 律の調子とて物の善悪を  
 占ふ方又一つもたがふ事あり  
 予とて心守武が能風と  
 ありて是て後の貞徳が深削  
 をそとけりといふ其白のこと  
 ありてえり  
 ○後花の兒のあほほど色香が  
 ○あつらふ事多しや雲の舟  
 あつらふ事〇そとせとてきくの吟  
 をそとめとてしりぐれゆ妙  
 ありてとりのりあり寛永  
 七年六月八十とて才あり  
 終る

張嘯子の近江國の一城王其の  
 嫡子也俗称木下若狭守勝  
 俊と云軒尾州の居住を生る  
 て和歌と嗜むの心ふく後其  
 職を辞し東山の隱道とて  
 長嘯子とよぶ或  
 時志加賀の花の杖を記して  
 琵琶湖の春の行は惜とて  
 ある所の嵐山の紅葉を見て吐  
 月橋の月を巻る杯のまふ  
 風月山水をのてあをひとて  
 北山大原野の菴をうり  
 和歌若干と綴りて是を奉  
 白集と題を今猶世あり  
 ありたり

相田望の



長嘯子  
 耳もなま  
 けりぎん



長嘯子  
 秋の葉  
 神の香  
 枯れ初風

次非



頓阿其父の梶井の執當源全  
 又良阿とある人の子にて初の名  
 と美奈尋とよむ比叡山に住し  
 高野ありての感空と号し後京  
 府あり四條の金蓮寺に入りて  
 頓阿と改む其の著言の歌  
 人ゆく○浄弁○慶雲○兼  
 好○頓阿をさうと和歌の四天  
 王と称せり  
 ○らづらゆ侍や姓のこゝ代中  
 ありあつはゆあひのいふもや  
 年光て西行の後とよむ東  
 山双林寺ゆきむ○ありあつ  
 の縁のそはの歌あり文中元年  
 八十四才のそ寂ま



野ノ口立圃の俗姓雜屋市兵  
 衛と云此人古今の習藝あり  
 鳥丸光廣の弟従て和歌とよ  
 く詠尊朝親王の書法をま  
 へて名譽あり画へ又將野探幽  
 小まふ俳諧の貞徳の門人小  
 てりともり上手のまゝあり  
 ○仍如やあせもほらも夕後  
 ○ほら火の川の脊中世といふ  
 ○ふらたつてあはれあま立田姫  
 又釋世のり  
 ○月夜のとほ目さしあま世  
 七十一才あてとある









千利久の田中氏幼名城与  
 四良と呼泉州堀ふらき  
 若も時足利家小仕  
 同朋の役とある千阿弥と  
 宗易ともよぶ茶の乃う  
 妙ある事い世の人の知る  
 所なり又和歌をもよくと  
 ○あくあこの歌い頃の侯小  
 夜網ひけるさまうをよそよ  
 いぞいめあやや都紫野  
 大徳寺の山門に我木  
 像を置るるふらよりてそ終  
 をよとせまを惜むべ



曾呂利新た湯門の和泉國  
 大鳥郡の産るる後回国  
 小移り住て初の朝と造り家  
 歩系とよま滑杖首一のせれ  
 めて高貴の人ふ寵愛せ  
 る事あふ方あふ無成時  
 曾呂利が門ふ落首し  
 粘あき一者ありそ歌ふ  
 ○柄のまもそばとるはとめを  
 君が心ふあひは乃さや  
 曾呂利がと実種々の活あ  
 且どの世の人とある所なれ  
 るあひのそ狂歌もむく詠  
 て曾呂利狂歌時といふもの  
 今もるはは





肥前島原禪林寺の住持と  
 知れぬれぬれを信する尼の此所彼  
 所尋求ゆふ都四糸河原の荒  
 野かたやあはさるる乞巧人の病  
 と必抱して居るに八尾の洞と流  
 何由かから河ふあさるるを洗そ  
 つれと脱捨は着まきとそ兼々  
 師ふあさるるに月ふあさるるを  
 彼もさるるに桃水の已足とそ兼々  
 彼もさるるに非人をもよへる傍に居る  
 飛人もも見るとそ只人ふあさるるを  
 俄ふあさるるにぬそれより此所中も  
 あさるるに大けのもむ小住草鞋つり  
 て往來の人ふあさるるに爺がこころを  
 よびて買入あさるるにとぞのせまきとも  
 の秋に我小家よるは大海画の跡  
 階の上の藤書一なるなり

又海女の伊勢国山田やる  
 松木赤右衛門とり人の妻  
 ありいと貞実ゆて諸藝  
 ありとかしこから俳諧を  
 ありとあさるる松田勾當の門  
 人あさるるも名譽あり鳴ふ  
 さ人のふに江州日吉の社へ奉  
 納せし秋仙の内の吟あり又  
 ○右じきりあられぬらむは先師



桃水和尚



杖と  
 花と  
 何所伝との  
 ぼ生れか  
 女と

松木赤右衛門の女



笑ひ  
 いふ  
 女と



井原西鶴の難波の人梅翁の  
 門人大坂談林の一人多住吉乃  
 社中一日二弟二千句を吟と  
 是より二萬堂と称せらる又  
 戯作の妙を得て○小夜嵐○織  
 雷○二代男○二代女○奴ら下あ  
 ちて○置土産のつるまてあま  
 たの著述あり凡物の本と作  
 程元業とまると奉り此西鶴を  
 元祖とせり又其吟も面白  
 ○我のこの松を由もちをかま  
 ○長持よまかかれゆ衣更  
 ○大海目定まる世のさあか  
 五十二才をまかりぬを釋  
 世よ  
 ○浮世の月をばさるる手巻  
 近松門左衛門信盛本姓松  
 本氏中伊藤園松山産平安  
 堂又巢林子の号あり若くは  
 時多らく京家お仕下り故あ  
 て肥前唐津の近松寺へ入  
 るべく禅法を修し又一妻を  
 て京へ登り都万太夫が座の  
 歌舞妓狂言と作り毎度新  
 奇妙案と出せり夫より大坂  
 竹本筑後が標坐の浄瑠  
 理と文作はる趣向意外  
 小づれは緒人これと感心るに  
 近松が新浄瑠理とだより  
 其芝居究めて大入るり  
 とて生涯二百余番の院  
 本をばる自定て碩才凡そ  
 ざるも能く時于其年七十二  
 才○それ辞世の一首とて終るぬ



○浮世の月をばさるる手巻  
 世よ  
 ○我のこの松を由もちをかま  
 ○長持よまかかれゆ衣更  
 ○大海目定まる世のさあか  
 五十二才をまかりぬを釋  
 世よ  
 ○浮世の月をばさるる手巻





僧契沖の空心と古俗姓の下  
 川氏の中代々武土の阿智梨  
 へ攝津國尼崎の生るはる  
 きつるそ才他はとてく五才の内  
 母百人一首と教ふた一遍の  
 てそれなれば両親共ふあつた  
 取それより後りやあ物とふ速  
 記憶せむとあふは十才少  
 出家あ高野山に登て密法  
 とまひびら此山も立のてあか  
 と修行せられけり○つとまひ  
 九才の時和泉玉之井の里の巷  
 せし節の詠るりとまきて此師  
 佛道のいもあつるるのあはれ  
 心源の普皇國の往古考  
 正事奉へ世の人の知るあつた  
 終の席中ふつらうがたけれが  
 ぬれぬ

肖柏法師の平親王のまを  
 和歌連の道の宗祇の道統  
 つけつ死自牡丹花と称ま勅を  
 うけたまひて連歌新式とつら  
 て其法とまむひとせ禁裡の  
 御會十五夜は死り出て  
 ○空よなほそえ夜や幾世秋の月  
 とゆけり  
 ○まよさうぬさのんやあつた  
 又○そまふ知さやの吟のま日下  
 あつては時節雨をとく句之此  
 吟ふよりて忽豊雨降じとあ  
 既其角より前肖柏があま  
 ありまらこれいふは菴の底  
 四季の草花を植且音春ふれを  
 あま酒を好まふとて行年  
 八十五才より泉州南郡の  
 没しぬ

後作

契沖阿智梨

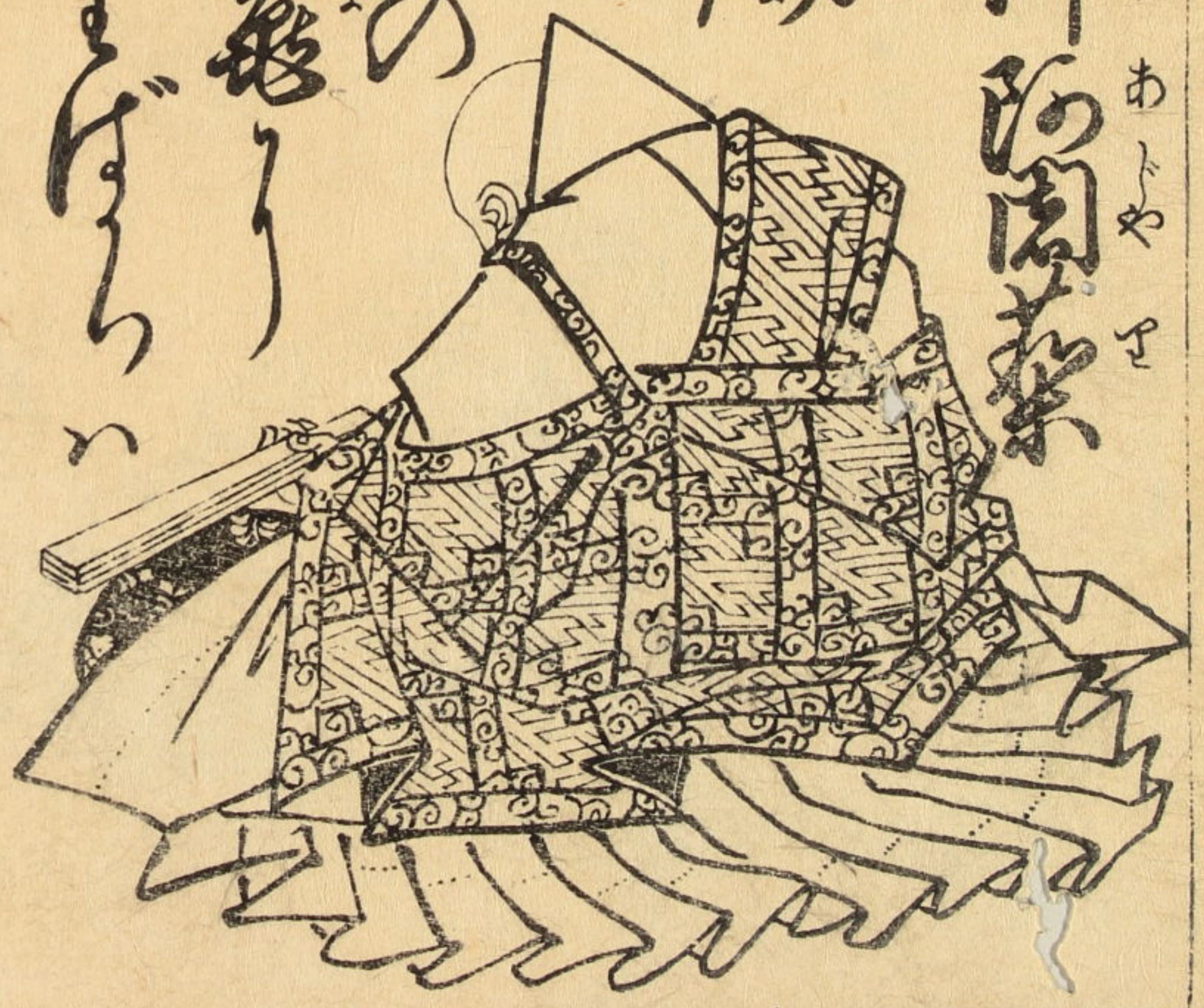
今

字

の

空

そら



牡丹花

肖柏



あめ

あめ

あめ



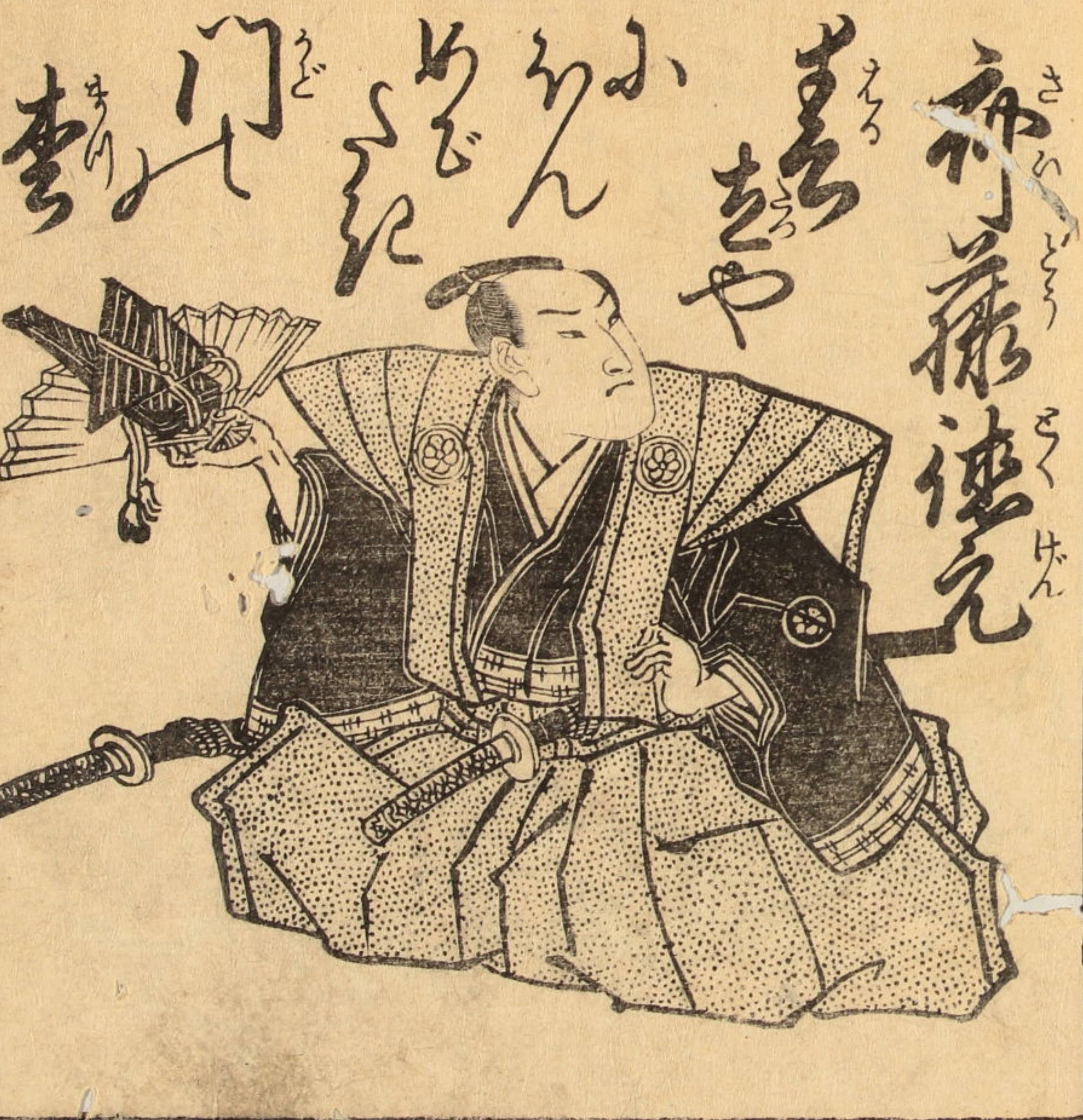
三



手車の公羽の何れの人との小車  
 ありて享保のたぐひ都の町を  
 行ふはたふいと公羽これ誰が  
 ちやとひつゝ糸のつ区車ま  
 せ童もこれのあれがの  
 りのつとめとを後の難波  
 へて糸のつとめとある  
 ぐ成対する家の軒下  
 庭にそを花を傍り  
 車都婆と速おぬ  
 の秋の糸の車都婆おぬ  
 てあはれありのつとめ人の世  
 歌ひてかまけんとの比都鄙  
 しかるあり



藤徳元美濃の人  
 初織田某はへが主の家断  
 級の後刺髪して院亭徳元  
 と名を改め江戸馬喰町お来り  
 て和歌の指南とて京に  
 登りて貞徳公羽の門人となり香餅  
 講を修行して一家派あり  
 ○まごのちやの吟は松井重頼が  
 狗子集とてふ時秀逸る  
 とて巻頭おあきしゆあり此  
 他世よまごえし吟ハ  
 ○何とてても雪やとてあはれ  
 ○大和とも唐ともは馬を  
 若狭園中を終るを辞世  
 ○まごのちやの吟は月夜が





ト養の泉州郷の人也牡丹  
花肖柏の孫あり父も俳諧と  
たしんで其名も養友とよぶ養  
生得和字の通ト兼て狂歌  
をよむ曾師階へ貞徳もまゝ  
○改年の由を養友の天下が  
○まゝとて養友のあつて  
或時竹林より虎の出る画の  
○まゝとて竹のあつて  
これと時とて乃一矢  
又京への行く人の別れよある  
○いろはまゝかまゝはうら  
社多もせむ多の住  
○名やあかの秋の東叡山  
て夏の咲るをて練  
のあり

石田又た養の江戸西野町  
住し人あり故あり哲相別  
小田原へ移り程あは江戸  
帰藩髪をく名と未得と  
冬先去狂歌とて世未  
名其の人のト養未得と並  
称せしと後貞徳の門  
入て号哉乾堂といふ  
○養子やそのまゝのま  
あまの○肥しあての句採俳  
諧も又妙ありを子良堂未  
琢がふ  
○河まはあれの亭を養友  
此人も又在欽とて門人  
あはうりといふ

半井ト養  
名ふ  
山を  
わが  
花やらん



石田未得  
おの  
おの  
おの  
おの









組来先生物茂御へ俗唱  
 萩生物右邊門と云武藏小  
 生れ上徳園成人其父の醫  
 として業とありか先生六幼  
 子に心とあり人をあられ志  
 して深し若年小大儒の  
 きこえ四方より行く事  
 あは方るま江戶小来りて  
 茅場町に住其舎其角が  
 隣ありと云され其角  
 か向小

○梅が香やささる萩は地を  
 とり吟あり人を教道なり  
 或日講釋の席ゆく○世の  
 中よ歌の縁れあり

芭蕉翁桃青の俗稱松尾忠  
 左衛門と伊賀岡上野の藩士  
 若より俳諧の乃を好む初の名  
 宗房と故ありて仕と辞し  
 薙髪して風羅雅坊桃青と号  
 江戸下りて深川に住巷中小  
 芭蕉を名づく植より心せり  
 公稱の名あり其吟ふ  
 ○舟とる帆とる風の心を  
 秀吟あまきの中も○ある池の  
 舟の世とて知る所る味代不  
 朽の心風一流と興凡元禄年  
 間俳諧を以て世不修者此人  
 の門人ら収れ稱る元禄七年  
 大坂の旅宿ふ疾病  
 ○たひふんで愛の林野と存まら  
 五十才と没る江州栗津長  
 仲寺小葬せり

組来物茂御



芭蕉翁





吉野の嶋原上林の梅女を茶の道  
 家屋常益と云ふかたの毎日毎  
 日吉野も其後年あけて雨人下京の片  
 辺に世帯してかきふる世を送る常山  
 あり此辺は所用ありて通り一軒  
 村雨より生れぬ思ふに此家雨舎  
 野只一人りあやけのちをみる小  
 茶器るのこころかあるも常山のこ  
 ころ好るなられ薄茶一服所をせ  
 小その手前もいとえさる色々感心  
 きて家おかり知る人小斯と居  
 小それと小息常益の住  
 家と其女を吉野のむげま  
 ありとあり我嫁小まもとの  
 也はとと兩人をよひさ家内む  
 つまらへくくくく



吉野の嶋原上林の梅女を茶の道  
 家屋常益と云ふかたの毎日毎  
 日吉野も其後年あけて雨人下京の片  
 辺に世帯してかきふる世を送る常山  
 あり此辺は所用ありて通り一軒  
 村雨より生れぬ思ふに此家雨舎  
 野只一人りあやけのちをみる小  
 茶器るのこころかあるも常山のこ  
 ころ好るなられ薄茶一服所をせ  
 小その手前もいとえさる色々感心  
 きて家おかり知る人小斯と居  
 小それと小息常益の住  
 家と其女を吉野のむげま  
 ありとあり我嫁小まもとの  
 也はとと兩人をよひさ家内む  
 つまらへくくく

丸山権太左衛門の陸奥仙臺  
 より出角力身の大六尺五  
 寸重さ四十二貫目其手形ハ  
 寸余ありとぞと難波の角力  
 小登り天満川崎る吉田氏  
 丸山を招き力量と試と小  
 算小あまを竹の園の内にあの  
 小ととて足と拾り主人大は小  
 小ととて実の希有の力なる此  
 竹我家の珍器とあま返と拾  
 たる所の上下と切と花入と丸山筒  
 と銘して今よ所蔵さ力士小似  
 はあく風流のなも好と吟  
 句のあまのこのひとちの吟  
 小昔太がえと蓮華會集  
 小入たり肥前長崎の角力小下り  
 彼地を没りぬ



丸山権太左衛門の陸奥仙臺  
 より出角力身の大六尺五  
 寸重さ四十二貫目其手形ハ  
 寸余ありとぞと難波の角力  
 小登り天満川崎る吉田氏  
 丸山を招き力量と試と小  
 算小あまを竹の園の内にあの  
 小ととて足と拾り主人大は小  
 小ととて実の希有の力なる此  
 竹我家の珍器とあま返と拾  
 たる所の上下と切と花入と丸山筒  
 と銘して今よ所蔵さ力士小似  
 はあく風流のなも好と吟  
 句のあまのこのひとちの吟  
 小昔太がえと蓮華會集  
 小入たり肥前長崎の角力小下り  
 彼地を没りぬ



大石内藏助良雄の其伴号と木鶴と  
 の播磨の小城主其侯の元光より主  
 家大變あり後都の片辺り山科の  
 閑居を此人主君の難言をひんて心と  
 千々一碎つていふ本望を返す世の  
 知る所あり事新くいふを滑筆  
 洒落も他におえて今も世の唄か雪と  
 題せる上方哥人此人の作るとを詩歌  
 連俳不盡といふる一とさう二画を  
 上るるつゝの末のめれ秋の時鳥の画  
 譜小詠しものり或去浪々の後園  
 扇の羽筆と画なるの久後の秋と  
 ○濁り江のあつた魚のいそむこと  
 あつた魚のいそむこと  
 斯流しとる説あり色小耽り酒  
 小狂に敵小油断せざる身のゆて  
 さる秋よとのゆ 餘云小疑心と起さ  
 せや内蔵助のさる意味あての  
 るるじと思つる



大石良雄

東雲より

つきの

可

ふれ

つ

端

月にか

天野屋理兵衛難波内平野町住  
 米の向九と諸家の藏本とのりの  
 との業とる性廣直めく受く  
 て源の曾屋の道も疎くは梅翁  
 宗因の晩年の門人あて俳諧もよく  
 せり播及赤穂の城主其侯の恩と  
 感とく其家臣木が難言討の共  
 小勞とつす此事小依て難波  
 と大谷外置崎村小退隱してそ  
 名と松永土森と号近辺の負者  
 と見れば財と絶と是と救ひ我菴  
 とまるる小川は橋とる往來人の助  
 とほ此他種々の善根とて念佛  
 三昧の信者とるり享保十二年  
 正月廿七日大往生とるり其同姓  
 今も猶京江戸の両地の連綿たる  
 偏小理兵衛を積善の餘慶るべ



天野屋理兵衛

男

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は



小野寺秀和千内と云ふ赤穂  
 の浪人其良雄と共小雛言討  
 義士其妻と丹子と云ふ  
 夫婦ひらく風流の心と云  
 本望を達せん為東へ下る  
 時途中より妻が許へ送り  
 文の内ふかのつけ一秋ふ  
 〇これでも又あふ坂とらわねか  
 たへやせまゝ死出の山も  
 〇よりのふねかゝる旅人の  
 のまよのれあふ身のゆゑも  
 又妻が方より返事に来り文の内  
 〇茶はあたる小泪の雨おと  
 〇いふさびごとこのまふもあ  
 けされぬの秋の夜討の時姓名  
 とあるせる短尺の重長にのせしん



子葉の俗称大高原吾と  
 〇小野寺が同藩是又義  
 士一人也十内が姉源五郎  
 母あり茶吉又小達一非諸  
 水間沾徳か門人也然も上  
 手あり  
 〇日小也白くいざさふれら山様  
 〇初ろと江戸は茂子の四季の汗  
 〇短尺小雛大名やう詔合  
 〇山を列峯といふ句の筆跡と  
 達し彼地を引あがす附某  
 院の門前ある酒賣家小  
 憩ひて吟トなる句ありと云









玉菊の吉原角町中万字屋の抱  
 の梅女より尺雅の才ありて来  
 竹の道もうたかほきさうり何  
 東曲の三弦を然こけ甘き  
 こころの縁の秋の式時客入恨  
 照との入ると題して秋のめと  
 し折の詠より全盛並ぶ方も  
 るかりが廿五才を一期とて  
 勤の内より身まうりぬ思ふ此  
 梅女廓まで死ねばこそ新益  
 上の今に至るまで茶屋が打ど  
 小燈の池をかほてそ後世とて  
 あまの袖双糸とりてこの句  
 集水調子とてうけし退善の  
 浄瑠璃の合はつらなり年あ  
 けの此里とてたるとまた文異日  
 死ね共かる幸れありては  
 が年参りの内は失うる不幸に

柳下亭種員撰集





